

TYPE OF INDUSTRY

開発の舞台裏

第29回 中小企業優秀新技術・新製品賞

りそな中小企業振興財団・日刊工業新聞社選定

優秀賞

「顧客のニーズからチャレンジしたが、このような製品をいつか作りた」といふ願望は昔から

湯山製作所

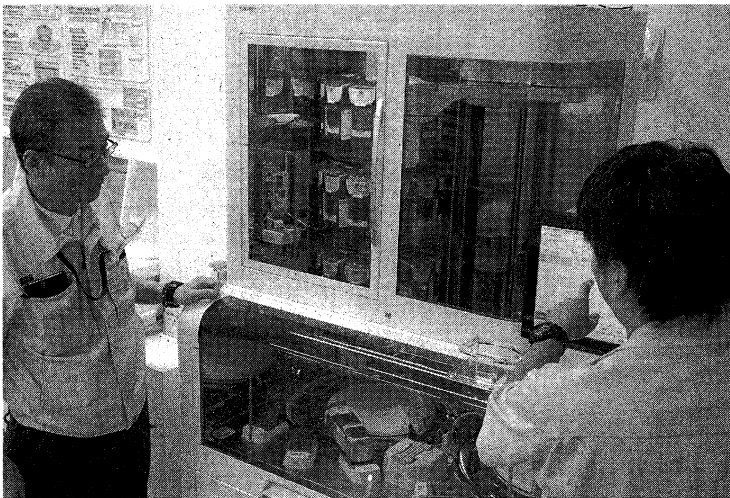
あった。湯山製作所（大阪府豊中市、湯山裕之社長、06・6332・1315）の北村光一取締役開発部長は、粉薬を全自動で調剤できる散薬調剤ロボット「DimeRo（ディメロ）」の誕生秘話を、このように切り出す。薬剤師は従来、処方箋の薬品を取り出し必要な量を計算したり、調合であれば混ぜたりするまでを手作業しなければならなかった。薬品の取り違えや計量を誤る不安と、それらを防ぐ検査の負担は時間的にも精神的にも大きい。同ロボはこうした調剤工程を、完全に自動化する。

北村取締役は「薬剤師

散薬調剤ロボット「DimeRo（ディメロ）」

薬剤師のストレス軽減

はストレスから解放され、本来求められる細やかな服薬指導が可能になる」と、意義を強調する。



調剤前の薬品を入れておくカセットが最大30個収まる（北村取締役㊦）

に送り出せた。送り出す力には圧電素子の振動を利用し、モーターを不要にした。カセットを搬送する腕型ロボットも独自に開発した。これらの技術などで、調合や分包まですべて自動化。

開発を始めたのは2010年。「調剤前の薬品を入れておくカセットや、調剤薬を分包の袋に注ぐホッパーの数はいくつ必要か」。薬剤作業の自動化機器を得意としてきたが、同ロボに前例はなく、基本設計から手探りだった。

顧客は処方数の多い大手薬局や病院。「これまで230台と予想以上に売れた。競合機はない」（北村取締役）と独走する。1薬品当たりの最少調剤量は2gだったが、0.5gまで少量化する機種も開発し、17年1月に投入した。調剤量を大人より少なくする必要のある小児科に適する機種として、新たな需要も創

出した。（大阪・田井茂）

（木曜日に掲載）

モノづくり基盤・成長企業